日　時　　児　童　６年
授業場　　授業者

１．単元名　室町文化と力をつける人々

２．単元観・子供観・指導観

本単元は，小学校学習指導要領解説社会科編の第６学年の内容（２）のア（オ），（シ）とイ（ア）を扱った単元である。内容については，室町文化を中心に取り扱う。室町文化を代表する文化遺産としては，金閣・銀閣・東求堂や雪舟が描いた「天橋立図」，能楽などがある。これらの文化遺産を取り上げて調べる活動を設定することで，文化に関する情報を適切に読み取る技能を育み，室町文化の特色に気付くことができるようにするとともに，現在の自分たちとのつながりを理解することがねらいである。また，それらの文化遺産を鑑賞することを通して，それらの文化が受け継がれてきたこと，現在の私たちの生活や文化の源流を考えるうえで，高い価値をもつことに気付くことができるようにし，我が国の歴史や伝統を大切にしようとする態度を育てることができると考える。

本学級の児童はこれまでに，各時代の時代背景や人物の働き，代表的な文化遺産などに着目しながら資料で調べ，我が国の国づくりの流れや世の中の様子の変化について，時代ごとや支配する側・される側といった立場の違いから比較しながら考える学習をしている。また，文化については平安時代の学習で和歌，囲碁，七夕，かな文字など今に受け継がれる貴族の文化について学んでいる。

そこで指導にあたっては，過去と現在を関連付けたり比較したりしながら文化の特色を考え，学習問題を解決できるようにする。具体的には，平安時代の貴族の屋敷に見られる寝殿造と室町時代を代表する建造物を比較することで，文化や時代の変化を読み取るとともに，水墨画など今の生活の中にも室町文化は継続されていることに気付くことができるようにしたい。また，室町文化が現在まで受け継がれている理由について追究する中で，経済力のある町衆が芸能・文化に積極的に関与したことや，文化の発展は政治的安定の中，地位の高い人たちの保護によって発展していることなどにも気付くことができるようにしたい。

２．単元の目標

京都の室町に幕府が置かれた頃の文化について，世界文化遺産である金閣や銀閣などの建造物，雪舟の水墨画などに着目して，写真や絵画，地図，年表などの資料で調べてまとめ，現代の生活様式と比較しながら関連付けて考え，今日の生活文化につながる室町文化が生まれたことが理解できるようにするとともに，室町文化が今の生活にもあることを意欲的に追究しようとすることができる。

３．単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア　人物の働きや代表的な文化遺産について，写真や絵画，年表などの資料で調べて，室町時代の代表的な建造や絵画の様子を理解している。 イ　調べて得た情報を整理しながらまとめ，今日の生活文化につながる室町文化が生まれたことを理解している。	ア　人物の働きや代表的な文化遺産に着目して問いを見いだし，室町時代の代表的な建造や絵画の様子について考え，表現している。 イ　室町時代の代表的な建造や絵画の様子などを相互に関連付けたり総合したりして，当時の文化の特色を考え，説明している。	ア　室町時代の代表的な建造や絵画の様子について，予想や学習計画を立てたり，見直したりして，学習問題を主体的に追究・解決しようとしている。 イ　学習したことをもとに，現在の自分たちの生活と室町文化の関わりについて考え，受け継がれてきた文化の大切さを考えようとしている。

４．単元のデザイン（全５時間）

主張する手立て

次	○学習活動（学習内容）	手立て	評価の観点		
			知	思	態
1	○写真を見て，気付いたことを発表する。 〈金閣〉 ・きれい　・金ぴか　・豪華　・お金がかかる 〈銀閣〉 ・銀じゃない　・地味　・和風　・安っぽい ○銀閣が国宝に指定されている事実を知り，金閣と銀閣について情報を集める。 ・どうしてかな？ ・金閣の方が立派な感じがするけど ・銀閣の方は和風っぽいよね 〈金閣〉 ・三階建て。寝殿造り，書院造，仏殿造。 ・寝殿造は平安時代にも出てきた。貴族の住まい。 ・足利義満（第３代将軍）が北山に建てた。多くの費用をかけて豪華。 ・足利義満は，明と貿易していた。征夷大将軍と太政大臣になった。 ・火災で焼失し，再建されている。 〈銀閣〉 ・二階建て。書院造と仏殿造。 ・足利義政（第８代将軍）が東山建てた。お金を集めて作ったが質素。 ・書院造は武士の住まいのつくり。 ○金閣と銀閣の比較し，疑問に思ったことから学習問題を設定する。 ・どうして，同じ時代でも違うところが多いのかな？ ・書院造とか共通しているところもあるけど… ・建てられた時が違うからかな？ ・他にも室町文化に関係するものがあるはず **【学習問題①】** **「室町文化とは，どのようなものだろう？」**	・金閣と銀閣の写真を提示する。 ・自分なら金閣と銀閣のどちらを評価するか立場を決めさせ，どちらも世界遺産であるが、銀閣のみが国宝であることを伝える。 ・児童が集めた情報や考え（問いに対する振り返り）はロイロノート上に蓄積しながら整理・分析していく。 ・「金閣と銀閣を比べてみてわかることは何かな？」と問うことで，同じ室町時代の文化（建物）でも違いが多いことに気付けるようにする。 ＊子供の疑問をもとに，学習問題を設定できるようにする。		ア	ア

2 ・ 3	○「室町時代の文化」について，自分なりの予想をもつ ・和風の文化　・世界に認められた文化 ・日本独自の文化　・新しい文化 ・豪華と質素が混じった文化 ○学習問題①を解決するための情報を集める。 ○集めた情報をもとに交流し，学習問題①について明らかにする。 ・雪舟が水墨画を日本風にした ・書院造が広まったので，ふすまの絵や床の間のかけ軸として使われるようになった ・生け花は床の間や茶室に飾られた ・武士や貴族の間で，茶を飲む習慣が広がった ・書院造の庭には，枯山水という様式の庭園が多くつくられた ・おとぎ草子（「一寸法師」）も生まれた **室町文化は，貴族と武士の文化に中国風の文化を取り入れた新しい文化** **【学習問題②】** **「室町文化とは，どのように生まれたのだろう？」**	・「学習問題を解決するには，何を調べる必要があるかな？」問い，予想をもとに，この時間でみんなが追究する視点を確認する。 ＊出典を明確にするよう確認する。 ＊自分の調べていることが，「単元の問い」との関係に妥当性があるか確認する ＊２時間目の最後には，ふりかえりの時間を設定し，「室町時代の文化は，どのような文化と言えそうか」自分なりの仮説をもつことができるようにする。 ・児童が集めた情報をロイロノートで共有する。 ・「室町時代の文化には，どのようなものがありましたか？」と問う。 ・写真資料や動画を用いながら情報を板書で整理し，事象同士の関連を捉えやすいようにする。	ア		ア
4	＊本時案参照		イ	イ	

5	○単元を通して学んできたことをもとに，室町文化について捉え直す（再評価）する。 ・今までは知らなかったけど，室町時代は今につながる文化がたくさん生み出されたので高く評価できると思う。 ・最初は，銀閣が国宝に指定されている理由がわからなかったけど，今につながるよさがあることで納得した。 ・金閣のようにきれいな方に価値があると思っていたけど，銀閣のように落ち着きがあるよさもわかった気がする。 ○学習したことを生かして，外国の方へ室町文化を紹介するパンフレットを作る。 ・「茶の湯は，室町時代に武士や貴族の間でお茶を飲む習慣が広まり，心を穏やかにしてお茶を楽しむ茶の湯の作法が定まっていったものです。気持ちが落ち着くので，ぜひ，体験してみてください。」 ・「狂言は，観客を笑わせる喜劇です。多くの作品がせりふやしぐさを中心としたものになっています。役者自身が，動物の鳴き声などを声に出して表現するので，様子を想像して楽しんでほしいです。」 ・「水墨画は，墨の濃淡だけで雄大な自然の風景を表現しています。雪舟は，４８才のときに中国にわたって技能を高めました。水墨画は今でも人々に親しまれています。」	・「『室町文化』について学んだことは何かな？」と問う。 ※１時間目の板書を提示することで学習内容を想起し，自分の考えの変化を捉えやすいようにする。 ・「海外の方へ室町文化を紹介するとしたら，どんなことを伝えたいかな？」 ※国語科「日本文化を発信しよう」の学習と関連付けながら，JICAで学校訪問する海外の方へ紹介しようという目的で取り組めるようにする。 ※ロイロノートに蓄積してきた情報や資料をもとにパンフレットを作成できるようにする。		イ	イ

５．本時の目標（４/５）

お茶・布・和紙などの商品作物を作ることで産業が発達して農民や町人が力をつけていったことと，単元を通して調べた室町時代に生まれた文化を関連付けながら室町文化が生まれた背景を捉えるとともに，現代まで受け継がれてきたことの意味を考え，説明することができる。

６．本時のデザイン

主張する手立て

教師の働きかけ（●発問，▲補助発問，■指示・説明）〇子供の学習活動	◆留意点　※評価
①前時までの学習をもとに，室町時代のまちや村の様子について捉える。 ●「(資料①②を提示し）何（をしている人）が見えますか？」 【絞る発問】 資料① ・たくさんの人が田植えをしている ・太鼓や笛を演奏したり，踊ったりしている人がいる ・お面をつけている人がいる 資料② ・牛を使って田んぼを耕している ・鉄がついた道具を使っている ・水を田んぼに流し込む装置みたいなのがある ●「室町時代のまちや農村は，どのような様子だったのかな？」 【広げる発問】 ・祭りや盆おどりが行われるようになった ・祭りのときは猿楽が演じられた ・田植えのときに豊作を祈って田楽を踊った ・田楽や猿楽は，能や狂言として広まった ・能は足利義満が保護して，観阿弥と世阿弥が完成させた。庶民の生活が題材になっている ・狂言は日常のこっけいな動作や台詞で人々を楽しませた ⇒**人々の暮らしの中から生まれた文化** ・牛や道具を使うことで，たくさん生産できるようになった ・水車みたいので，水を楽にたくさん使えるようになった ・協力して作業するから，役割分担をして作れるようになった。 ⇒**生産力の向上＝時間やお金に余裕ができた** ②まちや村の暮らしの変化と室町文化のつながりについて考える。 ●「室町文化はどのようにして生まれてきたと言えるだろうか？」 【深める発問】 ・まちや村の人々が力をつけたことで暮らしに余裕が生まれて新しい文化ができた ・今までの文化と違い，庶民から生まれた文化で親しみやすかった。だから，現在まで受け継がれている ・貴族や武士の文化が応仁の乱の影響で広まったことも関係している 室町文化は，貴族や武家の影響だけではなく，農民の生活の中からも生まれたことで，現在まで受け継がれている。	◆資料①「田植えをしているそばで田楽をおどる人」資料②「農作業の様子（想像図)」を提示する。 ◆前時までにまちや村（庶民の生活の中）で生まれた文化（祭り・盆おどり・田楽・猿楽など）や農業技術の進歩の様子に着目している児童の考えを取り上げるようにする。 ＊資料は手もとでも見やすいように，ロイロノートでも送付する。 **◆それぞれの資料を拡大しながら「この人は何をしているのかな？」などと発問Ⅱし，二つの資料の読み取りを通して，農民の生活から文化が生まれた背景に気づけるようにする。** ◆必要に応じて資料③「各地の特産物」を提示する ◆必要に応じて平安時代など貴族の文化を想起させて比べることで，庶民にとって親しみやすかった文化であることに気付けるようにする。 ※【知・技】 調べて得た情報を整理しながらまとめ，今日の生活文化につながる室町文化が生まれたことを理解している。 （発言・ロイロノート） ※【思・判・表】 室町時代の代表的な建造や絵画の様子などを相互に関連付けたり総合したりして，当時の文化の特色を考え，説明している。(発言・ロイロノート)

８．社会科における主張

(1)　社会科における「深い学び」の具現に向けて影響力を発揮し合う「学び合い」

社会科における「深い学び」とは，「主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず，主として社会的事象等の特色や意味，理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得する学び」である（中央教育審議会答申，2016）。この「深い学び」の具現に向けて，社会科や各分野の特質に根ざした追究の視点である社会的な見方・考え方をもって，課題解決を目指す学び合い，諸資料等を基にした多面的・多角的な考察，広い視野からの構想を行う学び合い，合意形成や社会参画を視野に入れながら議論を行う学び合いの展開を目指したい。

主張する手立て
①　子供が切実性を感じることができる学習問題（課題）に至るまでの工夫
②　焦点化した発問により対話的な学びを促す

①　子供が切実性を感じることができる学習問題（課題）に至るまでの工夫…Ⅰ

課題解決学習を基軸とする社会科において，学習問題（課題）の設定は極めて重要である。社会科における学習問題（課題）については，子供自身が追究したいという強い思いに駆られるようにすることが求められる。学習問題（課題）を成立させる上で，有田（2003）は「子どもたちが「既知（わかっている・理解している）」と思っていたことが，実は表面的なことで，本質的には何もわかっていない（未知）のだ，ということに気付かせる」と述べている。子供たちはこれまでの生活の中で，メディアをはじめ多くの情報に触れる機会があり，様々な生活経験をしている。しかし，その中で得た知識や情報は表面的なものであることがあり，表面的な知識と本質的な知識とのズレによって，そこから「知りたい，調べてみたい」という意欲を喚起することができると考える。本研究においては，既知から未知を認識し，ズレを生み出す学習問題（課題）の設定に至る工夫を講じることで，子供が切実感をもって学習に向き合うことができるのではないかと考える。

②　発問の工夫により対話的な学びを促す…Ⅱ

学習問題（課題）を設定し，その問題（課題）の解決を達成し，単元や本時の目標に至るためには教師の関わりが欠かせない。その関わりの中で最も重要なのが発問である。吉本（1986）は「発問では正しい答や結果がでるかでないかではなくて，答を生み出すために，どれだけ意味のある思考活動や表現活動がなされたかがむしろ決定的に重要になる」と述べており，発問は子供の思考に働きかけるものといえる。宗實（2021）は発問の類型として表に示す通り，３つに分類している。こうした発問は学習問題（課題）に至るためには欠かせないものである。一方で，田村（2018）は，「子どもの発言が，周囲の子供の発言，これまでの議論とつながっているか。これは学び合いの質を語る上で重要なポイントとなる」と述べており，子供の学びを受け入れ，つなぐ姿勢は深い学びを達成する上では欠かせないものである。発問において絞る発問，広げる発問，深める発問に加えてつなぐ発問の必要性を本研究では感じている。つなぐ発問の一例として，子供の発言を止めて「～さんがこの後何を言おうとしているかわかるかな？」と続きを考えさせたり，理解の早い子供に対して「困っている人は資料のどこに注目したら気付くことができるかな？」と気付かせようとさせたりすることで，学習がわかっているものだけで成立するのではなく，学級全体として課題に向かい，自らにはない視点をもとに構想できるように働きかけることが必要であると考える。

絞る発問	「だれが」「どこで」「いつ」など，人や場所，時間などに絞って問う際の発問
広げる発問	「どのように」と様子や方法を問い，追究させる際の発問
深める発問	「なぜ」と因果関係を問う際，その他の一般化を図る際，多面化・多角化を促す際の発問

発問の類型（宗實，2021）

＋

つなぐ発問	子供同士の思考をつなぎ，対話を促す発問

引用・参考文献
中央教育審議会（2016）.「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」.
有田和正（2003）.『学習技能を鍛えて「追究の鬼」を育てる　指導力アップ術④』. 明治図書.
吉本均（1986）.『授業をつくる教授学キーワード』. 明治図書.
田村学（2018）.『深い学び』. 東洋館出版社.
宗實直樹（2021）.『社会科授業サポート BOOKS　社会科の「つまずき」指導術　社会科が面白いほど好きになる授業デザイン』. 明治図書.
澤井陽介・唐木清志（2021）.『小中社会科の授業づくり　社会科教師はどう学ぶか』. 東洋館出版社.

(2)　授業の主張点

本時の目標は，「お茶・布・和紙などの商品作物を作ることで産業が発達して農民や町人が力をつけていったことと，単元を通して調べた室町時代に生まれた文化を関連付けながら室町文化が生まれた背景を捉えるとともに，現代まで受け継がれてきたことの意味を考え，説明することができる。」である。

本時で育みたい資質・能力は，室町文化が生まれた背景や現代まで受け継がれてきたことの意味について，商品作物の栽培を可能にした農業生産技術の発達によって農民や町人が力をつけてきたことを調べ，前時までに集めた情報と関連付けたりしながら考え，産業の発達によって当時の庶民が力をつけて暮らしが変わっていったことで文化を生み出すとともに，現在まで受け継がれている意味に理解を深めることである。

授業の主張点

①　事象のズレから生まれる子供の驚きや疑問から生まれる学習問題の設定

②「誰が」「何が」「どこに」など，資料の読み取りを焦点化する限定的な問いの工夫

①　事象のズレから生まれる子供の驚きや疑問から生まれる学習問題の設定

金閣と銀閣の比較を通して，どうして同じ時代の建物なのに違いが多いのかという疑問が児童から表出されることで，「室町文化」に興味をもって問題解決に取り組み，解決していく中で「どのように生まれて現在まで受け継がれているのだろう？」という新たな学習問題が生み出されていくと考える。

②　「誰が」「何が」「どこに」など，資料の読み取りを焦点化する限定的な問いの工夫

資料を読み取る際，子供たちは「どこ（何）を見たらいいかわからない」「何を書けば（答えれば）いいかわからない」ということから，対話につながっていかない場合がある。問題の解決に向けては，一人一人が読み取ったり調べたりした情報をもとに協働的に学んでいくことが重要になるため，「この人は何をしているのかな？」「これは何をするための道具かな？」などと限定的に問うことで，資料からわかる事実を読み取ることができるようになり，そこから全体共有を図ることができるようになると考える。

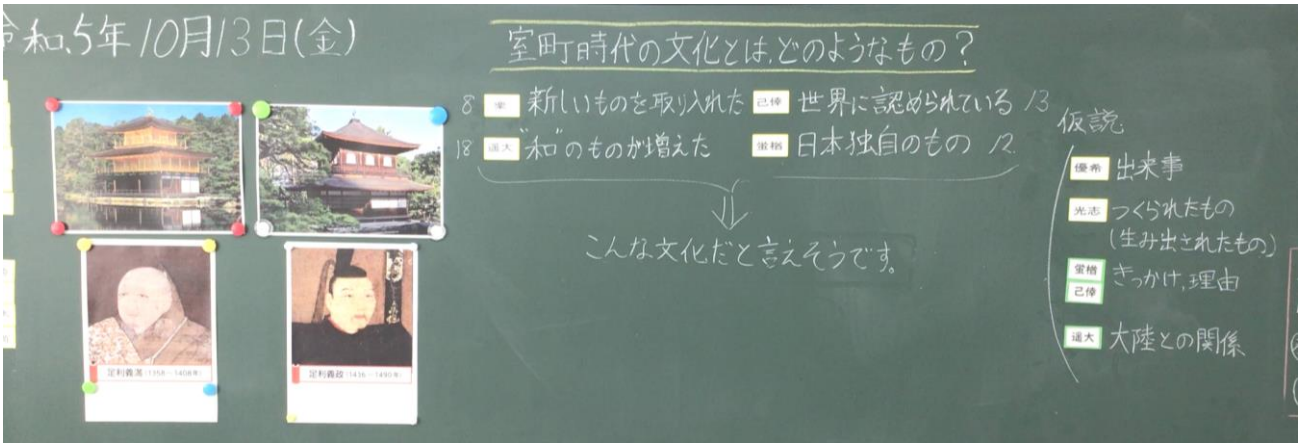
９．単元の学びの過程

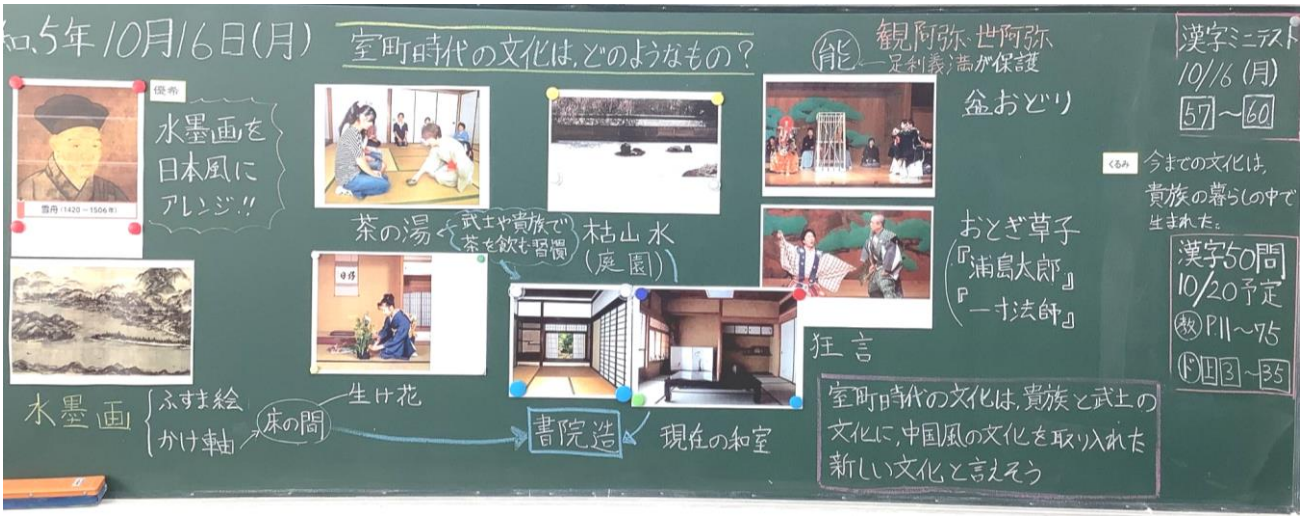
子供たちの様相（第１時）

・金閣と銀閣の見た目の感想を出し合って比較し，さらにどちらも世界遺産になっているが，国宝は銀閣だけある事実を教師から伝えたことで，「どうして？」「調べたい！」という発言が生まれた。

・金閣と銀閣の情報を集める中で，建物の内部にも違いがあることや，足利義満や足利義政が建てたことも見えてきた。

・同じ室町時代の建物なのに違いがたくさんあったため，「室町時代の文化とは，どのようなもの？」という学習問題を設定した。





子供たちの様相（第２・３時）

・室町時代の文化について「どのような文化と言えそうか」調べる前からもっている自分なりの知識をもとに予想（仮説）を立て，調べる視点を確認してから情報収集を行った。

・教科書，資料集に加え，図書資料やインターネットも活用して情報収集を行っていた。

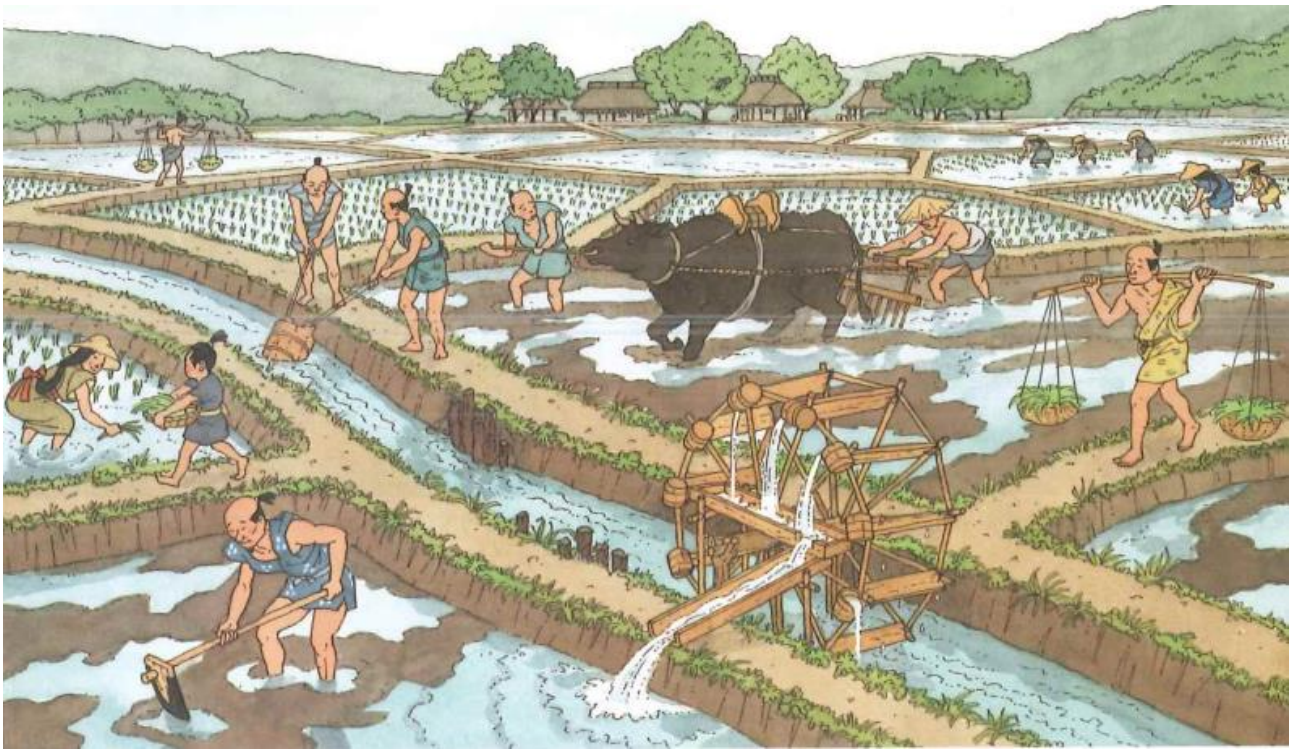
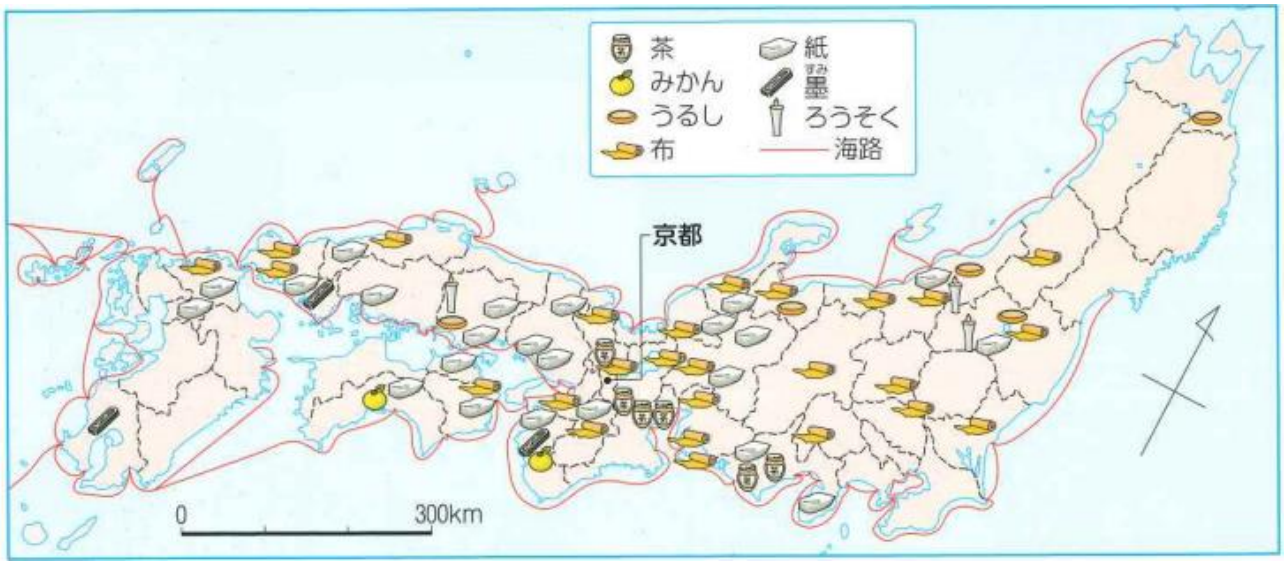
・第３時では，「室町時代の文化には，どのようなものがあった？」と問うと，教科書や資料集で取り扱われているほとんどの文化が出された。

・「書院造」との関わりに着目している児童の考えから，水墨画・茶の湯・生け花・枯山水とのつながりを見いだしていた。

・第１時の金閣と銀閣の内部を想起させたことで，調べたことと関連付けながら考え，「室町時代の文化は貴族と武士の文化と中国風の文化が合わさった新しい文化である」というまとめにつながった。

資料①

資料②



資料③